

特集 ● 占領と開拓の〈記憶〉

特別寄稿 サンパウロから帰国して — 石川達三『蒼氓』雑感

尾西康充

二〇一三年九月一五日から三カ月間、ブラジルのサンパウロ大学日本文化研究所の客員教授として、同大学の大学院生に日本近代文学を講義した。渡航費や滞在費、教材費などのすべての経費は、国際交流基金の負担であった。滞伯中、リオデジャネイロやブラジリアの連邦大学でも日本近代文学をテーマとするセミナーを担当した。

日本近代文学といっても、谷崎潤一郎、川端康成、三島由紀夫など、芸術的な志向の強い作品の系統は、ブラジルではすでに紹介されているので、それとは異なる社会的なテーマを扱った作品を講義することにした。短い期間ではあったが、①日系移民の悲劇を描いた山崎豊子「二つの祖国」、②原爆の被害を描いた原民喜「夏の花」と大田洋子「屍の街」、③貧困と格差の現実を描いた小林多喜二「蟹工船」を講読することにした。

「二つの祖国」は、第二次世界大戦中にアメリカ西海岸に住む日系人約一三万人が強制収容所に移送された歴史を描き出した。ほとんどのブラジル人は知らないのだが、ブラジルでも大戦中に、日系人が連行され、財産の没収や肉体的な虐待がおこなわれた。つぎに邦字紙「サンパウロ新聞」の「真相究明委員会」で初めて議題に「二〇一三年一〇月一五日」という記事を紹介してみよう。

サンパウロ市議会で二〇日に開かれたサンパウロ真相究明委員会の公聴会の中で、一九四二〜四七年のジェツリオ・バルガス政権下で日本移民に対して行われた迫害についての討議が行われた。六四〜八五年の軍事



サンパウロでの授業

政権時代以外に行われた圧政が議題となったのは、同委員会の設立以降で今回が初めて。ブラジル真相究明委員会のロザ・カルドーゾ弁護士は「ブラジル人を代表して謝罪をし、被害者に許しを請いたい。ブラジルのエリートたちは常に人種差別主義者だった」と述べた。

排日運動は、大戦前の一九二三年、日本移民を制限するレイス移民法案が連邦下院に提出された頃からはじまっていた。ジェトウリオ・ヴァルガス大統領の独裁政権（一九三〇～四五年のエスタード・ノヴォ体制）下では、表向きは外国人移民全体を対象としながらも実質的に日本からの移民を制限する新憲法が制定された。ブラジル国民の《白人化》を進めるためには脱アフリカ・脱アジア化が必要であるとし、日系移民による被植民地化に対する警戒感が示されていたのである。大戦を契機として、日系人に対する差別が本格化することになった。そして大戦終結後も、「勝ち組負け組抗争」という日系人社会の混乱に乗じて日系人の強制収容がおこなわれた。右の記事によれば、この公聴会では、「四六〇四七年にサンパウロ州北部海岸地域のアンシエッタ島に強制連行され、島内の収容所で収監された一七二人の日本移民について触れた謝罪文が読み上げられた」。「負け組」の脇山甚作退役陸軍大佐を殺害した容疑で、アンシエッタ島に一五年間収容されていた「勝ち組」の日高德一氏（八七歳）は、「一七〇人の日

本人收容者のうち約一四〇人は無実だった」と証言したという。

他方、原子爆弾の被害もまた、ほとんどのブラジル人が知らない。原爆文学を読むことを通じて、非人道的な核兵器の問題を共有することができた。サンパウロには、日本食料店を営む森田隆氏（八九歳）が住んでいる。広島市で被爆した森田氏は、在ブラジル被爆者協会の会長である。森田氏を店舗に訪ねると、店先で三脚椅子に腰を掛けて、日本から約一か月遅れて販売される岩波の雑誌「世界」を読んでいた。森田氏によれば、被爆当時、陸軍憲兵中国憲兵隊司令部において憲兵隊長を務め、国民を取り締まる側の人間であった。しかし被爆の惨状を目撃した瞬間、それまでの世界観が一変したという。今では大勢の家族に囲まれる幸せな生活を送っているものの、ブラジルの日系人社会でも被爆者に対する差別があったと語った。

ブラジル社会における最も深刻な問題は、貧困をめぐる社会問題である。「蟹工船」は院生たちに大きな刺激を与えた。日本で出版されたばかりの拙書『小林多喜二の思想と文学』（大月書店）を、出版社から直接現地に郵送してもらって、補助教材として院生たちに配布した。

サンパウロ市内には、いくつものファベラ（貧民窟）がある。福祉施設の市職員に案内してもらって、私は、麻薬と暴力がはびこっていたモンテアズールという町名の貧民窟にかけた。市政府は補助金を出したり、授産所を設けたりと、様々な施策をおこなっている。ブラジルの連邦政府も、連邦大学の学生定員および連邦下院の議席の二〇パーセントから五〇パーセントを、黒人貧困層に割り当てるなど、相当強引な方法で格差を是正しようとしている。しかし、これには保守・中道層からの反発も強い。

貧民窟の隣には、高級マンション街が聳えていた。彼らは交通渋滞を避けるため、自宅からヘリコプターで通勤する。他方、ファベラのなかは環境整備が不十分で、狭い路地には救急車などの緊急車両も入ることができない。明治の文学者北村透谷が「知らずや、人は魚の如し、暗きに棲み、暗きに迷ふて、寒むく、食少なく世を送る者なり」（時勢に感あり）と記した通りの光景が、サンパウロには今も実在するのであった。



銀行のストライキ

* *

神戸北野の山本通にある国立海外移民収容所は、南米ブラジルを中心とする海外移民を送り出すための施設であった。移民たちは出航前にこの施設に入所して、現地での生活の基本情報に関する講話を聴き、健康診断や予防接種を受けた。一九三〇年三月八日、春雨に煙る神戸港の情景から小説を起筆したのは、石川達三であった。達三本人が大阪商船の移民船らぶらた丸に乗って渡伯した体験は、小説「蒼氓」（星座）創刊号、一九三五年四月）として発表された。排水量七二六七トン、船客数九〇〇名のらぶらた丸は、喜望峰を経由する西回り南米東岸航路に就いていた。一九二六年から三九年まで合計三二回日伯間を往復し、移民輸送総数は一万八四〇四名にのぼった。達三は移民たちの姿をみて衝撃を覚える。達三によれば、「私は雨の中にひとり出て行き、赤土の崖のふちにうずくまり、だれにも顔を見られないようにして、しばらく泣いていた。私はこれまでに、こんなに巨大な日本の現実を目にしたことはなかった」という。さらに「私はこの時はじめて『作家』になっ

かった。そしてこの衝撃を、私は書かねばならぬと思ったかもしれない」と告白するのであった。⁽¹⁾

「蒼氓」は第一回芥川賞（一九三五年上半期）を受賞したことで知られている。「蒼氓」を第一部とし、第二部「南

海航路」と第三部「声無き民」を合わせて単行本『蒼氓』（三五年一〇月、改造社）が出版された。しかしブラジル移民の間では、ほとんど読まれていない。私自身も日系文学の関係者に尋ねてみたところ、本のタイトルしか知らないし、別に読む気にもならないという人ばかりであった。「移民の悲惨イメージを広めた張本人とされる作品」として、きわめて評価が低いのである。たとえどれほど自分の生活がみじめで悲しいものであっても、それを他者によって語られることは、恥辱を与えられるのに等しい。ちなみに同書のポルトガル語訳は、ブラジル移民一〇〇周年に当たる二〇〇八年にサンパウロのアテリエ・エディシヨナル社から刊行された。マリア・フサコ・トミマツ、モニカ・セツヨ・オカモト、タカオ・ナメカタが翻訳し、マルシア・ヒトミ・タカハシが校閲した *Sobô Uma Saga da Imigração Japonesa* である。しかし、版元が学術書を専門に扱う出版社であったこともあって、日系コロニアの社会——大戦後、ブラジル永住を決意した人たちの間から「日系コロニア」という言葉が使われるようになったとされる——では、ほとんど普及されなかったという。

その一方、細川周平氏によれば、『蒼氓』の「第三部のブラジル編ではあつけられんとするほど気楽な暮らしが描かれて」おり、「この描き方には政府の定住政策が関わっていると考えられる」という。⁽³⁾「政府の定住政策」に沿って書き進められているとされる点は、石川巧氏が「権力の期待する通りに成長する群衆を美しく描くという手法において権力の機構そのものを温存するような働きさえしている」と指摘した点に重なるだろう。⁽⁴⁾

このように『蒼氓』は、ブラジルの日系コロニアの人たちからは「悲惨すぎる」といわれ、文学研究者からは「楽観的すぎる」といわれている。移民の場合に限らず、だれかに代わってその人の生活を描くことの難しさがみられる。とりわけそれが社会正義の視点から表現される場合、そこに一方的な価値判断が下されてしまっているという印象を持たれてしまうと、その作品から説得力が失われてしまう。達三は、当時の日本社会には「生活の絶えざる脅威と圧迫、絶えざる反抗と焦慮、不安と怒りと絶望とが有るばかり」であったとする。収賄や汚職といった政財界の腐敗、金輸出解禁にともなう経済危機、「工場のストライキと共産党事件の裁判」、軍縮会議などの事

件が続く、「母国の終焉を見るように悲しかった」という。ブラジルには猛獣や毒蛇、鰐、そしてマラリヤなどの「無数の迫害」があるが、それでも「日本の農村の津々浦々までも行き互った文明の脅威」に比べれば何でもない。「日本の農村のどこに農村らしい駭蕩としたものがあるか」というのである。

達三はこの作品に「農民出身の移民集団を描くことによって、政府の移民政策に一種の抗議をするような性格」を持たせようとし、「権力に対する庶民的な抵抗という姿勢」を示すことを作家人生のモチーフとした。⁽⁶⁾しかし移民船のなかの移民たちは、どれほど不平が高まっても「いつまでも煙を上げているばかりで纏まった意見は出来あがらず、監督に交渉するという実力手段もなかなか行われるものではなかった」。彼らは「力を合わせて、塊になって不平を叩きつけるという方法を知らないようであった」。E室の黒肥地は「まだ二十五、六歳の血気あふれるばかりな九州男児」で、彼らの間で「一番はげしく反抗の口吻を洩らしていた」。しかし彼もまた、直接その不平を監督に向かって叩きつけるような意識は持たなかったのである。

彼等は農村に在っていつもこういう不平を抱きながら、しかも誰に叩きつけてよいかわからないで親子代々をすごしてきた。不平は不平だけで終り、満足な状態にむかつて積極的に努力するということは常に不逞なことを考えられて来た。それは永いあいだの政治の悪が馴致した憫れむべき習慣であり習性であったかもしれない。「政道に対して口をさしはさむ」者は刑に処せられる時代が永く彼等を支配していた。船のなかの不平は不平のまま夜で夜のふけるとともに消えて行つた。

この後、黒肥地は酒を買って飲んで寝てしまう。「そうすることによって自分の不平を消すことができる」のを彼は知っていたからだという。調教された奴隷の心性を描いたこれらの表現を読めば、石川巧氏が指摘するように「権力に虐げられた人間の「抵抗」などどこにも存在していない」ように思われる。⁽⁶⁾

主人公の一人、秋田県田沢出身の大泉進之介は、司厨室の手伝いをはじめると、自分たちの食膳には決して運ばれることのない贅沢な食材が冷蔵庫に貯蔵されていることを知る。「郷里にいれば何も考えない善良な百姓であったが、船に入り司厨室の手伝いをしてみて「階級」というものを見せられたのだ」。「心の底から善良な男」であった大泉は、「こういう比較をすることによって自分が不幸になるにすぎない事を感じていた」。同じ船には、彼ら移民たち三等船客とは異なる、アメリカ人などの一等船客も乗っていた。「シンガポールから乗りこんだアメリカ人の女」が事務長を呼びつけて、夕食の時間に日本人がデッキで運動するので、寝かしつけていた赤子が目を覚ますと苦情を申し立てた。移民の間から子守を雇うなどの対処がとられたが、それも失敗に終わってしまい、移民の間には「外人という奴はけしからん」という感情が残るだけであつたのである。

*

*

人種や資本によつて構成される「階級」を目の当たりにしながらも、何ら抵抗できなかったのは、なぜか――。松本清張は「蒼氓」(芥川賞受賞作。第一部)を読み返してみても、その描写が小林多喜二に似ているのを知った。石川のリアリズムは、プロレタリア文学からの影響である。しかしプロレタリア文学とは対極にあるのは、達三の「傍観者の観察態度」であるという。このような松本の発言や、「蟹工船」における集団描写の技術⁽⁷⁾が『蒼氓』の表現方法に影響を残しているかもしれないとする久保田正文の指摘を踏まえ、松本和也氏はつぎのように論及した。

「蒼氓」とは、文学シーンにおける「社会性」の欠如が強迫観念的に意識された文芸復興期に、「蟹工船」の社会性を持つ題材や題材を生かす手法を換骨奪胎して、時代性と社会性を持った題材を常識的・表層的に小説化したテキストなのだ。しかも「蒼氓」は、「蟹工船」後に小林が提唱した社会的現場における実体験を重視した『報告文学』⁽⁸⁾の実践としても見事にその圏域に収まっている。(傍点およびルビは原文ママ)

「換骨奪胎」や「常識的Ⅱ表層的に小説化」という言葉に否定的な意味を込めた松本氏による論及は、さきに引用した「権力の機構そのものを温存するような働きさえ果たしている」という石川氏の指摘とともに、『蒼氓』というテキストが抱えている問題点を剔抉している。「移民とは口実で、本当は「棄民だ」と言われていた」移民の側に立つといいながら、⁽¹⁰⁾実際の作品は、それを見事に裏切っていたと思われるのである。「反権力を謳う石川がいかに関心を持権化しているか」という「石川の作家的資質」が問い直される必要があるのはいうまでもない。⁽¹¹⁾また、『蒼氓』が「プロレタリア文学と報告文学を接続」することで「社会性を持つ題材」を描こうとする「昭和十年前後の言説編成」に一役買ったことや、⁽¹²⁾「ある主体が群衆を間に挟んで国家と対峙し、自分はひとりで立っている」という認識のもと、超越的な位置から群衆を眺め、彼らの成長を見とけるといふ展開がいかに関心を持権化し、権力の機構そのものを温存してしまう」結果になったことなど、⁽¹³⁾『蒼氓』に対する批判は尽きないようにみえる。

だが、ここでもう一点考慮すべきことがあるように思われる。多喜二は「蟹工船」執筆に際し、労働農民党や労働組合が北洋漁業の労働問題をめぐって闘争していた経緯を取材した。その一方、達三の前には（読者が期待するような）権力に抵抗する移民などそもそも存在しなかったのである。海外移民は、外貨および植民地の獲得のために『海外雄飛』するという「名譽」を与えられると同時に、過剰人口を日本社会から放逐するために『口減らし』するという「余計者扱い」を受けていた。プロレタリア文学壊滅の後、文学的抵抗がほとんど不可能になったとき、このような両義的な意味を担わされていた彼らに、それまでプロレタリア文学によって社会的関心を高められていた読者が、『抵抗する群像』というイメージの形を通じて、もはや満たされなくなった自分たちの願望を投射しようとしたにすぎないのである。

細川周平氏によれば、アメリカやメキシコへの移民のなかには共産党と連帯した人々もいたが、ブラジル一世が政治運動に加わったという報告はない。⁽¹⁴⁾また、一九五三年からの戦後移民は、永住を前提とする政府間事業

として取り組まれたので、戦後の移民船の小説にプロレタリア文学の雰囲気がないのは当然であるという。⁽¹⁵⁾ サンパウロ在住の文芸評論家安良田済氏（九八歳）に尋ねてみたところ、日系コロニアの作家たちにはプロレタリア文学の影響はなかったという。高い見識を持ち、日系作家のなかでも尊敬を集めている安良田氏自身は、「父帰る」などの菊池寛の作品が好きで、そこから社会正義のテーマを学んだと話した。生活条件のため低く抑えられた学歴しか持たない農民層が主であった移民たちにとって、たとえ差別され抑圧された現実を目の当たりにしていても、それが「階級」による社会格差であることには気づかないのであった。コーヒー農園での作業がいかに過酷なものであったのか、アマゾンでの開拓事業がいかに困難に満ちたものであったのか、各自の実感をもつて個別的な状況を描いた記録類は、数多く残されている。個別的な体験を積み重ねてゆけば移民一般の生活を再現でき、現地を知らない読者でも、それらを読めば彼らの生活を追体験できるだろう。しかしそれだけでは文学作品として真に価値のあるものにはならないのである。

*

*

日米開戦にともなって米国支持を表明していたヴァルガス政権は、連合国側に加わることを表明し、日本政府に対して経済断交や国交断絶を宣言した。その結果、一九四二年七月、在伯日本公館の職員が外交官交換船で帰国してしまう。笠戸丸に乗って渡伯した〈第一回移民〉の香山六郎は、そのときの心境をつぎのように語っている。

我々は平素一面には天皇陛下の赤子だと認識を強いられながら、一面はいざとなればサヨナラもつげられずに棄民扱いをされたのだ。私達は駐伯日本外交官の吾々に対してサヨナラも告げずにかくれるように逃げていくような態度に彼等の民族的、否人間的教養の浅はかさをしみじみと感じていた。吾々移植民に永住せよなんておすすめる外交官連中が敵性外国人となれば一番に尻に帆かけてにげ出すお偉方なんだ。日本外交官頼むにたらず——と痛感した。⁽¹⁶⁾

香山は、耕地通訳や鉄道工夫、大阪朝日新聞通信員などを務めた後、邦字新聞「聖州新報」を創刊したという経歴を持つ。《錦衣帰国》でできる日を夢見て生きていた移民たちは、このとき自分たちが《棄民》であることを否応なく見せつけられた。このとき国家と個人との間の信頼関係が損なわれたのだが、そのことに抗議したのは少数で、むしろ大多数の者は《名譽》回復にむけて国家への忠誠心を昂じさせたのである。サンパウロ人文科学研究所の元所長宮尾進氏は、このときの心情を分析し、「戦時状況下での邦人の唯一の望みは、「神国不敗」の信念のもとに、やがてかなえられる戦勝の暁に、帝国日本の勢威あまねき「大東亜共栄圏」の地に再移住し、安住できる日を待ち望むことであり、その日に備えて皇国臣民として恥じない耐乏の生活をする¹⁷⁾ことが、正しい生き方であった」とする。ここにみられるのは、社会的周縁に生きる人ほど承認の欲求が強く、社会的統合を希望するという論理である。

この逆説的な論理は、日本敗戦後に、日本の勝利を信じて疑わない「勝ち組（信念派）」と、敗戦を認める「負け組（認識派）」抗争となつて噴出する。この抗争に関しては、まさに「サンパウロ新聞」を引用したが、今なお不明なところが多い。敵性民族の言葉である日本語を使うことが一切禁止され、情報量が乏しかった当時、正確な情報を入手できにくかったという事情もあったが、サンパウロ州の奥地を中心に日系移民の八〇九割が「勝ち組」に加担していたといわれている。¹⁸⁾「勝ち組」の過激分子は武装組織を結成し、主に都市部にいた日系コロンビアの支配層や知識人層の「負け組」を襲撃した。襲撃事件は八六件、暗殺された者は二三名に上った。「勝ち組」の機関誌「旭号」が休刊宣言をおこなう一九五六年二月まで続いたこの抗争は、現在に至るまで日系人社会に分裂の禍根を残している。これほど深刻な問題に関しては、私などが容喙すべきではない。だが、これは個人が「名譽」と「尊厳」の回復を求める「承認をめぐる闘争（Kampf um Anerkennung）」であったといえるのではないか。この抗争の背景には、だれもがブラジルに永住する気持ちはなく、いつかは祖国に帰りたいと思っていた日系人の社会が抱え

ていた、『価値共同体としての社会集団』の未成熟という問題があった。農村部にいた大多数の移民にとって、都市部にいた支配層や知識人層への帰属意識は低く、彼らの口から日本敗戦の報を知らされても俄かにはそれを信じられなかった。農村部では、理想的な社会集団の構成員にみられる個性化や平等化などの意識が発達しておらず、都市と農村との間で日系人社会の連帯感が不十分であったからである。本来異郷の地にあって連帯すべき同胞であるにもかかわらず、集団的な内部抗争を通じて、祖国への直接的な社会的統合を志向するという手段をとったのである。

* *

さきに述べたように、神戸移民収容所のバラックの待合室に充滿していた「人いきれとみじめさ」を、達三は「私はこの時はじめて『作家』になったかもしれない」と告白した。この部分、三・一五事件で特高警察によって激しい拷問を受けている組合同志の代わりに、自分がその惨状を告発しなければならないと思った多喜二の作家的出発に似ている。多喜二の場合、「私はその時何かの顕示をうけたように、一つの義務を感じた。この事こそ書かなければならない。書いて、彼奴等の前にたゞきつけ、あらゆる大衆を憤激にかり立てなければならぬと思った」（一九二八年三月十五日、「若草」第七卷第九号、一九三一年九月）という——達三（一九〇五〜八五）と多喜二（一九〇三〜三三）は同じ秋田県出身である。「蟹工船」開巻劈頭の「おい、地獄さ行くんだで！」と、『蒼氓』冒頭の移民の最初のセリフ「大泉、進之介でござえまし」、いずれも秋田方言である——しかし社会正義の視点から、だれかに代わってその人の生活を描くという作家の使命感は、作家の意図通りには機能しないという事態を招くことがある。『声無き民』をめぐる問題群は、つねに『植民地主体』の語りのアポリアと密接に関連している。

二〇一二年、日系三世中里オスカルが、日系移民の苦難の歴史を描いた『NINONJIN』という小説で第五四回ジャブチ賞（ブラジル書籍協会主催）を受賞した。ブラジルにおける最高の文学賞の設置から五四年目に、はじめて日系人が受賞できたこととともに、三世にしてようやく日系人みずからが自己の来歴を語る本格的な小説を描くこと

ができたことに注目すべきであろう。三世にもなると生活言語のポルトガル語が第一言語になっており、もはや日本語は失われてしまっていることが多い。この小説もポルトガル語で執筆されている。だがそのことによって歴史と距離をとることができるのかもしれない。決して一般化されることのないような特殊なできごとに着目し、そのなかにある人間実存の普遍的な相を見定めて表出することによって、ようやく文学本来の使命が達成されるのではないだろうか――。

石川達三の本文は、新潮社版『石川達三作品集』に拠った。

注

- (1) 石川達三『心に残る人々』(一九六八年十二月、文藝春秋社、一九四―一九五頁)
- (2) 細川周平『日系ブラジル移民文学』Ⅱ(二〇一三年二月、みずず書房、七頁)
- (3) 同右
- (4) 石川巧「群衆はいかにして国民となるか―石川達三『蒼氓』」(『国文学解釈と鑑賞』第七〇巻第二号、二〇〇五年二月、八〇頁)
- (5) 石川達三『経験的小説論』(一九七〇年五月、文藝春秋社、一一頁)
- (6) 同右、八〇頁。
- (7) 松本清張「石川達三」メモ(『文学界』第三九巻四号、一九八五年四月、一一七頁)
- (8) 久保田正文「もう一つの昭和十年代」(『昭和文学史論』、一九八五年一〇月、九〇頁)
- (9) 松本和也「石川達三『蒼氓』の射程―『題材』の一九三〇年代一面」(『立教大学日本文学』第八九号、二〇〇二年一月、一五〇頁)。なお松本氏は、杉内昌子氏「石川達三の『蒼氓』に関する研究―構成と成立過程を中心に」(『実践文学』第四一号、一九七〇年二月)の「この作品が『個人』よりも『集団』を描いている」という指摘を踏まえている。

- (10) 前掲(1)、一九四頁。
- (11) 前掲(4)、七三頁。
- (12) 前掲(9)、一五〇頁。
- (13) 前掲(4)、八〇頁。
- (14) 前掲(2)、九八頁。
- (15) 前掲(2)、三二二頁。
- (16) 香山六郎『香山六郎回想録 ブラジル第一回移民の記録』(一九七六年九月、サンパウロ人文科学研究所、四一八～四一九頁)
- (17) 宮尾進『臣道聯盟 移民空白時代と同胞社会の混乱―臣道聯盟事件を中心に』(二〇〇三年一月、サンパウロ人文科学研究所、一八二頁)
- (18) 泉靖一編『移民Ⅱブラジル移民の実態調査』(一九五七年八月、古今書院) 参照